看護大通信

〈149〉

AIと「2045年問題」

県立看護大学　人間環境科学領域教授　中村　義実

「2045年問題」という言葉をご存じでしょうか。

AI（人工知能）がこのまま発達し続けると、全人類の知能の総量を越え、以降、コンピューターの行く末を人間が予知できなくなる。2045年にその「特異点」を迎えるというのです。

これが私たちにとって福音になるのか、災厄になるのか、知る人はいません。

車の運転がすべて自動になる日もそう遠くなさそうです。医療の世界でも、患者のデータから病名や治療法が一瞬に示される未来像が目に浮かびます。

これらの発展を担う主役は紛れもなくAIです。交通事故は減り、医学は進歩し、人間の寿命も相当延びるでしょう。一見、人類の未来は明るく映ります。

しかし、光と闇は背中合わせです。様々な職業がAIに奪われるでしょう。AIが失業や格差の問題を解決できるでしょうか。人間同士の会話が劇的に奪われていく可能性もあります。

今やスマホが人間と一定の会話をこなしつつある時代です。AIは間違いなく便利を提供しますが、私たちを幸福に導くか否かは一概に判断できません。

話は飛躍しますが、未来社会において「全知全能」のAIと結びついた人類が新たな進化を遂げるという説があります。

一方、AIに攻撃を仕掛けられた人類が滅亡を余儀なくされるという説もあります。

ひょっとすると、映画「マトリックス」や「ターミネーター」の描く世界がもはやSFとは言えなくなる日が来るのかもしれません。

繰り返しますが、AIの未来は誰にも見えません。ひとまず判断を留保して、情報を集め、他者の意見を聞き、自身で思索を続けながら、柔軟に向き合っていく姿勢が求められます。

「2045年問題」への備えとして、差し当たり私たちは、人間同士の血の通った会話を大切に守っていきたいものです。

世が変化しても、文字通り、私たちが「人」の「間」で成長していけるように。